

フィンランド英語授業視察記
—授業観察・参加者調査を通して—

A Study of English Lessons in Finland
through Classroom Observation and Surveys

小林 めぐみ (成蹊大学)、深谷 素子 (鶴見大学)、草薙 優加 (群馬大学)

成蹊大学一般研究報告 第48巻第3分冊

平成26年5月

BULLETIN OF SEIKEI UNIVERSITY, Vol. 48 No. 3

May, 2014

フィンランド英語授業視察記

—授業観察・参加者調査を通して—

A Study of English Lessons in Finland through Classroom Observation and Surveys

小林 めぐみ (成蹊大学)、深谷 素子 (鶴見大学)
草薙 優加 (群馬大学)

Abstract

This study reports the results of classroom observation in Finnish high school English classes and the quantitative results of questionnaire administered to Finnish high school students as well as Japanese university students. Two of the authors visited Finland in order to find out how some features of Finnish education may be applied to promote extensive reading in Japanese university English education. Although extensive reading has been gaining popularity in Japanese universities as an effective way to improve English, motivating students to keep reading remains a challenge. Finland is known as a country of avid readers and some features of Finnish education such as the use of concept mapping have been reported as highly effective in improving reading comprehension. Classroom observation revealed, however, that Finnish reading instruction in English lessons are not vastly different from the Japanese counterparts, and neither extensive reading nor the use of mapping was observed. However, the questionnaire results showed that Finnish students have more positive orientation toward learning English compared to Japanese students, leading us to think that once again, motivation is the key to successful learning rather than specific features of reading instruction.

Keywords: extensive reading, education in Finland, learner autonomy, motivation, mapping

1. はじめに

本稿は、「複合的多読授業の研究：フィンランド式教育法に基づくアクティビティの開発」プロジェクト⁽¹⁾の一環として実施した、フィンランド、トゥルク（Turku）市の公立中学・高等学校の英語授業視察報告記である。本プロジェクトの主目的は、学力低下、学習意欲低下が叫ばれる日本人大学生の英語読解力、英語運用能力全般の向上を図ることである。

2002年文部科学省が「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を打ち出すも、その構想は達成できていない。学習者を英語嫌いにせず、英語力の養成をも迫られた大学英語教育の現場では、学習者の英語力に見合った英語の本を楽しみながら大量に読むことで英語学習への積極的態度を育むと同時に、大量インプットによる英語力向上をもたらす多読に注目が集まり、1990年代にHill(1997)、Day & Bamford(1998)による多読プログラムの具体的方法論の確立を経て、日本では、2000年代に入り酒井(2002)、酒井&神田(2005)、SSS英語学習法研究会(2005)、高瀬(2010)らによって実践と研究が行われてきた。

多読の顕著な特色としては、学習者の自主性を重んじ、自由に好きな英書を選んで読むFree Voluntary Reading(FVR)や楽しみのための読書(Reading for Pleasure)、日本の小学校で行われている「朝の読書」のように、教師が介入せず一定時間静かに本を読むSilent Sustained Reading(SSR)が挙げられる。FVR/SSRを含め、Day & Bamford(1998)が提唱する多読10原則、あるいは酒井(2002)らの多読3原則に基づいた多読は、心理的障壁である学習者の情意フィルター(Krashen, 1982)を下げて学習意欲を喚起し、これが大量の英語読書につながって英語力向上をもたらすとされる。

しかし、2011年9月に京都で開催されたThe First Extensive Reading World Congressの基調講演で、リーディング教育研究の第一人者であるGrabe(2011)は、多読が読む力を身につけるのに必要不可欠な要素であることを強調しつつも、授業時間にSSRを過度に取り入れることには慎重な態度を取り、多読促進のための教師の役割や授業内でのリーディング指導の再検討を促した。Grabeの主張は、授業でSSRだけでなく、教員の指導やその他の活動に授業時間をバランスよく配分すべきであるとの指摘だと考えられる。同時にこの主張は、有効な授業内SSRの継続が難しいことをも示唆している。例えば、大学の必修授業の一環として多読を実践する学習者の多くは、最初は自由度が高く、自分のペースで取り組むことのできる多読に大いなる興味を示し、授業内SSRを歓迎するものの、しばらくSSRを続けるうちに次第に集中力が散漫になり始める。これは、授業という枠組みの中で、必修課題としてSSRを義務づけられた学習者が、FVR/SSRのみで英語読書への興味を増大させ、読書を持続させるには限界があることを示唆していると言えるだろう。読書を継続するためのインセンティブを見失った学習者の多読は停滞し、結果として読書量が伸びず、英語力向上にも結びつかない。本研究メンバーは、多読が大学教育に広まるにつれ浮上したこの問題点を踏まえ、精読と多読の組み合わせ、

読書の「質」を変える授業内アクティビティを、停滞しがちな多読活性化の方策として提示してきた（Fukaya, 2010; 深谷, 2011a, 2011b; 小林, 2011; 小林&河内, 2009, 小林, 河内, 深谷, 佐藤 & 谷, 2010; Kusanagi, 2005, 2009; 那須, 2011）が、決定打と言える成果を示すに至らなかった。

そこで、本研究メンバーは、新たな多読活性化のヒントを求めて、これまで実践してきた授業内アクティビティと共通する要素を持ち、読解力に加えて、自ら学ぶ力、生きる力をも養成するとされるフィンランドの教育法に着目した。主体的な読みや対話を促す多読教育にフィンランドの教育の知見を取り入れ、両者の融合によって多読をさらに活性化させ、その結果として読書量、英語力全般の向上を図るのがねらいである。フィンランドの教育は、テキスト内容の正確な把握に留まらず、より主体的な読みによる読解力、発想力の習得や、「なぜ？」と問う習慣による批判的思考力の醸成、対話やグループ学習の積極的導入による表現力、コミュニケーション力の向上などが、その特徴とされている（北川, 2005, 2006; 小林, 2009; 田中, 2010, 2013）。また、「カルタ」と呼ばれる放射状思考ノート術（「マインドマップ」⁽²⁾、マッピング、メモリー・ツリー、放射思考、思考の地図などとも呼ばれる）が多用されるとも報告されており（北川, 2005, 2006; NHK, 2012; 田中, 2010）、北川、田中は、これらを「フィンランド・メソッド」⁽³⁾と呼んでいる。

一方で、北川や田中らによって広く伝えられている「フィンランド・メソッド」は、フィンランド教育の一側面を伝えているに過ぎないという声もある⁽⁴⁾。したがって、本研究でフィンランドの教育法を多読アクティビティに取り入れる前に、その実態と効果を検証し、多読や読書がどのように教育に取り入れられているのかを把握するために現地調査を行うことにした。なお、フィンランド教育の視察報告は近年増加しているが、初等教育全般を調査対象としたものが多く、英語教育に特化したものは少ない。今回の視察は、フィンランドの特徴的な教育が英語の授業ではどのように具現化されているのかを明らかにしようとしている点で意義があると言えよう。ただし平均的な日本人大学生の英語力は、フィンランドの大学生の英語力と比べ、かなりの差があるため、日本人大学生と近似していると推測される中学生、高校生を対象とした英語授業を視察することにした。

2. フィンランドの教育システム

2.1 フィンランドについて

フィンランドは、ヨーロッパ北部に位置する人口540万人（北海道、兵庫県の人口とほぼ同じ）、面積338,430平方キロ（日本よりやや小さい）の国である。1917年にロシアから独立し、1995年にEUに加盟している。公用語はフィンランド語とスウェーデン語で、バイリンガルの国と言われている。フィンランド語は多くのヨーロッパ言語と異なり、膠着語系のフィン・ウゴル系言語である。国民の90%はフィンランド語、5%がスウェー

デン語、1%がロシア語を母語としている。スウェーデン語がもう一つの公用語なのは、13世紀から19世紀初めまで、隣国スウェーデンの領土であったためである。

フィンランドは農業国だったが、現在の産業構造は、サービス業65%、生産・精製業31%、第一次産業3%である。1940年代から1960年代後半までに、北欧型福祉社会の実現に取り組み、男女平等、高齢者福祉の先進的取組みで知られている。1970年代には、先進工業国としての生き残りをかけ、教育制度改革を行い、近年は、過去4回のPISA・OECD生徒の学習達成度調査（文部科学省, 2000, 2003, 2006, 2009）で、15歳児の読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーが首位、あるいは首位に近い成績を収めたことから教育分野でも注目を浴びている（フィンランド外務省; OECD, 2012）。

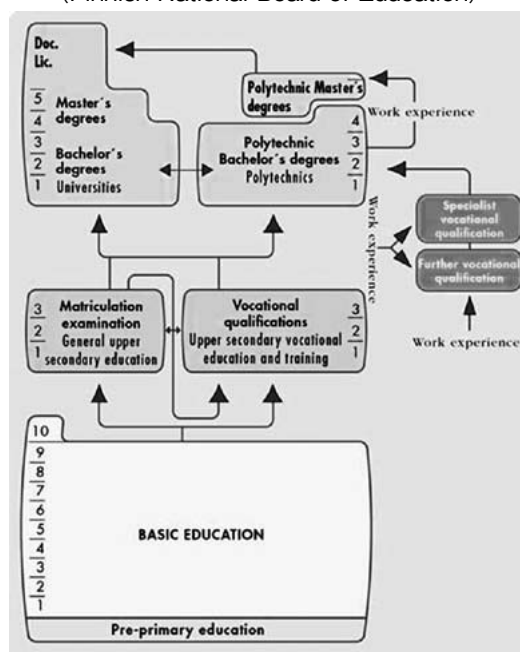
2.2 フィンランドの教育

フィンランドの義務教育（総合学校1年生～9年生）は7歳から16歳までで、義務教育は市町村単位の自治体で運営され、学費だけでなく教材と給食も無償提供されている。義務教育終了後は、ほとんどの生徒が高等学校か職業学校に進学し、各々への進学は半々である。高等学校卒業時には大学入学資格を得るための国家試験（Matriculation Examination）を受験する。高等学校や職業学校における中等教育、大学やポリテクニックにおける高等教育は任意であるが、いずれも学費は無償である（フィンランド外務省）。

フィンランドの教育を特徴付ける理念と制度の一つに「平等」が挙げられる。どのような社会背景の生徒にも平等な教育機会を付与することを第一前提にしている。上述のとおり、教育は全員に対し無償であり、学校間の学力差も最小にする努力がなされており、国際的に最高位の水準を保っている点が注目に値する（OECD, 2012）。このように高水準の教育を可能にするものとして、教育力のある教員の存在が指摘されている。教員になるには、大学の教育学部で3年間、大学院で2年間の教育を受ける。大学院には付属校があり、そこで1年間、教育実習する必要がある。

フィンランドでは、1980年代に経済的危機があり、国際社会での生き残りをかけ、1990年代に従来の中央集権型教育から大幅な分権化と学校・教員の裁量による教育へと、

図1 フィンランドの教育
(Finnish National Board of Education)



大きな教育改革を遂行した。「平等」も教育改革の一環として取り組まれ、その方針は平等な教育機会の提供という信念に反映されている。PISAの好結果は、これらの改革の産物である（ヘイノネン&佐藤, 2007）。

2011年より1年間、トゥルク市のルオスタリヴオリ（Luostarivuori）中学校・高等学校に訪問教諭として在籍し、理科の授業も担当された慶應義塾普通部の矢澤和明氏⁽⁵⁾へのフィンランド教育に関する筆者の聞き取り調査によると、「学校は勉強するところ」という意識が教員、生徒、保護者の間で共有されているという。学校には部活動はなく、学校が友達との交流を楽しむ場所という認識もあまりない。学校に対して、友達と付き合い、部活動に励み、社会性や人間性を身につけることを期待していないという。イギリス、アメリカのアングロサクソン式教育が、学校を共同体、組織体としてみる傾向があるのに対し（愛校心、校歌、制服などがある）、ヨーロッパ大陸式教育は、学校を機能体として捉えている（河村, 2011）。そのため、教員は授業のみに専念できる。このような教育制度を作り出したことも、フィンランドの教育改革の一つなのではないかと矢澤氏は指摘する。

また、フィンランドの教育におけるテストの存在は大きく、中等教育は5学期制で学期ごとにテストがある。テストの評価は厳しく、合格しなければ進級できないため生徒は真剣に取り組む。また、最終学年ではすべて記述式の卒業試験（国家試験）がある。このように、各教科の学習には外発的動機付けも大きく作用しているようにも思える。ただし、フィンランドの教育では、テストは重視するが平均点や偏差値は出さず、クラスや学校の中で個々の生徒がどの位置にいるかは重要ではないという認識がある。競争意識が全くないわけではないが、日本のような歪んだ競争意識は見られないとのことである（矢澤氏談）。

「外国語としての英語」授業は9歳（日本の小学校3年生相当）から学ぶ。1994年に導入されたNational Core Curriculum(2004年改訂)はCommon European Framework of Reference for Languages(CEFR, ヨーロッパ参照基準)を基盤にデザインされている。英語は第二言語ではないが、日本でいう中学生（総合学校7～9年生）で英検2級程度の英語運用能力（CEFR A1/発信能力、B1/受容能力に相当）を獲得し、高校生だと英語でディスカッションできるレベルの英語運用能力（CEFR B2/発表能力、C1/受容能力）、大学入学時に、より高度な英語運用能力（CEFR C1以上）を獲得することが求められている（高田, 2010）。

3. 教育視察の概要

本研究メンバー2名は、2012年8月29日～31日の3日間、慶應義塾普通部主催の「フィンランド中等教育学校との異文化交流プログラム」（2012年8月28日～9月5日7泊9日間、教員3名 生徒23名）に一部同行し、トゥルク市のルオスタリヴオリ中学校・高等学校にて英語授業（4教員、9授業）を視察する機会を得た。当プログラムの参加生徒が、現地

校で合同授業やホームステイ交流を行っている間、視察者は表1に示した授業の観察、教員・保護者の面談調査、生徒への読書アンケート調査を実施した。これらの調査では、生徒の英語力と読解力向上を支える教授法を観察するとともに、読書習慣と発想力、論理力、表現力、批判的思考力を生み出すと言われている「カルタ」の使用について調べた。

表1 視察日程

月 日	時 間	内 容
8月29日	10:00-11:00 11:45-13:15 13:30-14:30	ルオスタリヴオリ中・高の歓迎会に参加 授業観察 (1クラス) ルオスタリヴオリ中・高教員と教員室にて懇談
8月30日	08:15-13:00	授業観察 (3クラス)
8月31日	08:00-13:00 14:30-16:00	授業観察 (5クラス) Turku University of Applied SciencesでMr. Timo Linnossuo (ホストペアレントで同大学講師) へのインタビュー

トゥルクは、首都ヘルシンキから南西へ特急電車で約2時間半の場所に位置し、人口約18万人のバルト海沿岸の旧首都として栄えた美しい町である。街の中心をアウラ川が流れ、その南側に、トゥルク大聖堂や美術館ほか各種学校が立ち並び、川の北側に鉄道駅、ホテルやショッピング街が広がる。歴史的にスウェーデンとのつながりが深く、スウェーデン語はすべての学校で必修科目とされている。

視察したルオスタリヴオリ中・高に通う生徒たちは、経済的に恵まれた階層が多く、保護者も教育熱心であることは、慶應義塾普通部の生徒たちをホームステイに受け入れる姿勢から窺い知ることができる。廊下ですれ違ふと挨拶をしてくれる生徒もおり、授業中はきちんと授業に集中している。生活面、学習面ともに教育が行き届いているという印象だった。教員もみな、極めて協力的で、こちらが学校のことや、フィンランドの教育について質問すると、英語の教員に限らず、みな流暢な英語で様々な情報を提供してくれた。

4. 視察報告（授業観察・アンケート調査）

観察を行った授業の詳細は以下のとおりである（表2）。ルオスタリヴオリ中・高の授業スケジュールに合わせて可能な限り英語授業の見学を試みたため、中学1年生から高校3年生までと幅広い構成となっているが、できるだけ日本の大学生と年齢の近い高学年の授業を中心に見学した。授業時間は中学校では1クラス45分、高等学校では75分からなる。人数にはばらつきがあったが、生徒数が30人を超える授業はなく、20名前後が多かった。観察した約200人の生徒のうち81名（高校生）からアンケート調査の協力を得た。

表2 観察授業一覧

No.	教員	視察日	視察時の主な授業内容	対象	授業時間	人数 (男, 女)	アンケート
1	A	8/29	Reading	高1	75分	29 (17, 12)	-
2	A	8/30	Reading (期末試験直前)	高3	75分	15 (7, 8)	実施
3	A	8/30	Oral English	高3	75分	17 (5, 12)	実施
4	C	8/30	Writing (Essay)	高2	75分	19 (5, 14)	-
5	B	8/31	English (Speaking)	中3	45分	20 (6, 14)	-
6	D	8/31	English (Presentation)	中3	45分	18 (6, 12)	-
7	A	8/31	Reading	高3	75分	26 (17, 9)	実施
8	C	8/31	Listening Comprehension	高1	75分	28 (9, 19)	実施
9	D	8/31	English (Listening)	中1	45分	28 (12, 16)	-

表3 教員情報

教員	年代	性別	備考
教員A	50代後半	女	留学経験はないが教員研修期間中3カ月ほど住み込みのベビーシッター (au pair) としてイギリスに滞在した経験を持つ。その後も1カ月単位で様々な英語圏での滞在経験あり。
教員B	40代後半	女	デンマーク在住経験あり。ビジネス経営者でもある。
教員C	20代半ば	女	教員になってまだ数年。イギリスに1年間滞在。
教員D	30代前半	女	父親がアメリカ人、母親がフィンランド人で幼いころから英語とフィンランド語を日常的に使用。

授業観察時は、事前に用意した観察リストを使用し、別途授業の進行を時系列のフィールドノートに記録した (Appendix参照)。また許可が得られた場合には写真とビデオ撮影を行い、視察の補足資料とした。あらかじめ設定した観察のポイントは、以下に報告するように、教室環境 (教室のレイアウト、施設、活用方法)、授業の指導内容と形式 (主な内容と指導方法、カルタ利用の有無、教師と生徒の発話の割合、教師の問いかけの種類、ペア・グループ活動の有無)、そして生徒の受講態度、反応、クラスの雰囲気である。

4.1 教室環境

ルオスタリヴオリ中・高の教室施設は、日本の大学の施設と大差なかった (写真1参照)。教室前方の隅に教師用の机や椅子が、備え付けのPCや教材提示装置 (OHC) などとともに置かれており、生徒用の席の並びは2席ずつ横3列、縦6列ぐらいの構成が多く、30~40人程度の生徒を収容できる構造である。キャビネットや本棚があり、掲示板上には英語圏のポスターなどが貼られているが、ごく一般的な教室環境である。



写真1 教室の風景

授業中、多用されていた器具はプロジェクターで、教材の提示はOHCを使用し、音声はPCからCDを使って流していた。設定に時間がかかる様子はなく、スムーズに切り替えができていた。ホワイトボードを使った板書は多くなく、キーワードや宿題の提示がほとんどだった。また実際の授業では使用しているところを観察できなかったが、ヘッドセットが生徒の人数分用意されている教室やPCが設置されている教室もあった。

4.2 授業の形式

授業の形式も、日本の多くの教員が行っていると思われる授業と大きく異なる点はなかった。授業の流れは、授業開始時に見学者紹介、挨拶を経て、欠席者を確認、PCに出欠記録を入力し、宿題と予習を前提に教科書に沿って授業を進め、宿題の指示で終了するのが基本的な構成である。授業によって多少異なるものの、多くの授業は教科書を中心に進める方式で、教員の質問に対して生徒が次々に答えていく教員主導スタイルが中心であった。

4.2.1 主な授業内容と指導形式

視察した授業の多くは、一部を除いて4技能統合型であったが、Listening, Speaking, Writingの要素が取り入れられていたものの、主要部分はReading、それもパラグラフ単位で本文の内容を確認する精読が中心であった。教科書は学校で統一され、どのクラスでも、重要表現はフィンランド語に訳して確認する（translateという語を使用）ということが重要視されているようであったが、文法や構文に関する説明や練習はほとんど行われなかった。

例えば高校3年生のクラス(表2, No.2)では、政治トピックを扱いconservative, suffrage, referendum, coalition government, vote of no confidenceなどといった重要単語の復習が行われていた。このような語彙は、日本の大学レベルの教科書では頻出しない高度な語彙である。国家試験対策を視野に入れた復習でもあるとのことだが、トピックごとに体系的な単語の提示、学習がなされている。

なお、重要単語の確認は、宿題として各自がわからない単語の意味を確認していることを前提として、1)教員がフィンランド語でヒントを出して、英語で答えさせる、2)

英語でヒントを出して、英語で答えさせる、3) 英語の単語を提示し、フィンランド語で意味を言わせる、といった方法がよく見られた。生徒は教科書の重要単語にハイライトや下線を引いて、しっかりと注意を払っていた。その場で辞書を引くような行為は見られず、誰も辞書を持って来ていないようだった。これについては、教科書にすでに glossaryがあるため、特に辞書は必要としていないと思われるという担当の教員から指摘があった。また教科書とワークブックが充実しているらしく、プリントを追加で配付することもなかった。

4.2.2 カルタ利用の有無

今回の視察で最も注目していたのは、フィンランド教育の代名詞のように使われるいわゆるカルタを授業で利用するかどうかであったが、残念ながら視察中にカルタが使われることはなかった。英語教員および他の教科教員との懇談によると、カルタはフィンランドの教員ならば誰もが知っている非常に馴染み深いアクティビティであり、よく使われる指導法であるという。例えば英語の授業では、Writingのアイデア出しや、内容をまとめる際に使ったり、単語を系統立てて学ぶ際に使ったりするとのことである。とはいえ、カルタは、至極当然のことながら、それを使うことが適切な場合に適宜使用するものであり、毎回の授業で使用するようなことはないとのことであった。

4.2.3 教師と生徒の発話の割合・教師の問いかけ

視察した授業では、発話の割合は概ね教師が7~8割、生徒が2~3割という印象であった。また教科書の内容を確認するための質問が多く、フィンランドの教育の特徴としてよく指摘されるような、初等教育の授業で常に「なぜそう思うのか」という理由や意見を求める質問をすることは、グループ・ディスカッションなどの時間を除いてあまり見られなかった。また授業中教員はフィンランド語と英語を併用していたが、生徒のレベルが高い場合、ほぼ英語を活用していた。しかし完全に母語を排除することはなく、フィンランド語による解説も予想していたより多かった。

4.2.4 ペア・グループ活動

ペアもしくはグループ活動は、ほぼ全クラスで、少なくとも5~10分程度行われていた。特に教科書の一節（特にダイアログ）をペアで読み合う、教科書に記載された質問についてお互いに意見を述べるというペア活動が多かった。このような活動はどのクラスにおいてもルーティーンらしく、生徒は即行動に移ることができていた。特に説明が必要なタスク、特殊な活



写真2 ディスカッションの様子

動はあまりなかった。

写真2は高校3年生のクラス（表2, No.3）におけるグループ・ディスカッションの様子である。教科書で提起された問題（e.g., Should women go to military service? 等）について話し合う活動で、生徒はやはり教科書に提示された賛成と反対の意見を表明する表現を必ず使うという条件のもと、15分ほど自由に英語で話し合いを行っていた。教員はグループごとに巡回し様子を見ていたが、生徒は教員が来ないときでもフィンランド語に頼ることなく楽しそうに話し合いを続けていた。

4.2.5 クラスの雰囲気・生徒の受講姿勢

視察者がいるために普段より態度がよいと先生方は苦笑していたが、生徒らは概ね静かに、きちんと教員の指示を守って授業に取り組んでいた。まず、教員からの指示を受けて行動するのに時間がかからない。また、教員の質問に対して、大抵は誰かが手を挙げて答えるので、誰も答えないというようなことが頻繁に起こる日本の現状とはやはり異なる。そのため、無理やり当てられて「わかりません」とごまかしたり、ふてくされるような生徒はいなかった。これも宿題をやってくるということが浸透しているからと思われる。もちろん宿題・予習を忘れる生徒もいるとのことだが、その比率は少ないように見受けられた。これについては、生徒に何らかのアクティビティをさせている間に、教員が教室を巡回して宿題をやってきたかどうか一人ひとりチェックしており、生徒の自律的態度もさることながら、そのような指導も功を奏しているようであった。

なお、生徒の指名は、万遍なく当てるというものではなく、同じ生徒が何度も当たることもあった。これは自主的に手を挙げる生徒の中から選ぶためと推測できる。ただ、一見やる気がなさそうに見える生徒でも、時々手を挙げていて、当てられるとそれなりにきちんと答えていた。高校生ともなるとだるそうな様子を見せる生徒も散見され、とりわけやる気のない生徒は教室の後方に座り（座席自由）、途中居眠りをしたり、落書きをしたり、隣の生徒とおしゃべりをしたり、携帯電話をいじったりしていた。この様子は日本の教室と変わらないが、そのような生徒でも授業放棄をしておらず、時折、挙手して答えていた。さらに、英語の質問であっても、質問が聞き取れないという生徒もいないようで、基本的な受け答えは英語でこなしている。しかもその受け答えはかなり自然な英語であった。

5. アンケート結果

日本の学生とフィンランドの生徒の違いをさらに比較する一つの材料として、アンケートで得られた回答も非常に示唆的であった。視察時に合計81名の生徒にアンケート調査を実施した。比較対象として、東京のある私立大学の選択授業でReadingを学んでいる日本人の大学2年生57名にも同じ質問項目を含むアンケート調査も行った。アンケートはどちらの回答者にも同じ条件で、外国語である英語で提示した。

表4はそのアンケート結果の一部をまとめたものである。それぞれの質問には、1 全くそう思わない、2 そう思わない、3 どちらでもない、4 そう思う、5 強くそう思う、の5段階で回答してもらったが、表4の数値は各質問に対する回答の平均値を示したものである。つまり数値が高ければ高いほどそのグループ全体として英語学習や読書に対する肯定的な姿勢が強いと解釈できる。

この表から読み取れることは、各質問に対して、フィンランド人回答者の数値のほうがやや高めの傾向があるが、いくつかの項目（問3、8、9(c)、9(d)、9(f)）を除けば、全体的な回答パターンは意外なほどに似ているということである。例えば、問5、6、7に対する回答は日本人、フィンランド人ともに高く、「英語を読むことが英語力向上に役立ち」（それぞれ4.47と4.53）、「英語ができるということは自分にとって大事」で（4.44と4.54）、「英語は最も大事な外国語である」（4.37と4.42）と認識している様子が見られる。また、問9(e)のように、「日記やブログで英語を書いて英語学習をしている」人は日本人、フィンランド人とも少ない（1.96, 1.91）。また、問9(g)の結果に見られるように「多読を実践している」かどうかの回答も同じような数値であった（3.21と3.31）。

表4 読書と英語学習に関するアンケート結果（日本人大学生とフィンランド人高校生）

Questions	J N=57	F N=81
1 I enjoy reading (native language).	3.89	4.07
2 Reading (native language) is very important in my life.	3.75	3.41
3 I like English.	3.54	4.26
4 I enjoy reading in English.	3.26	3.93
5 I think reading in English helps improve my English ability.	4.47	4.53
6 Being able to use English is very important for me.	4.44	4.54
7 English is the most important foreign language for me.	4.37	4.42
8 I frequently use the Internet resources to study English.	2.58	3.36
9 I practice English by		
(a) learning grammar books	3.33	3.20
(b) memorizing vocabulary	3.77	3.65
(c) watching TV/movies, etc. in English	2.88	4.30
(d) listening to a radio	2.18	3.14
(e) writing a diary/blog	1.96	1.91
(f) talking to English speakers	2.67	3.26
(g) reading a lot in English	3.21	3.31

反対に大きく異なっていた点は、まず問3の「英語が好きだ」とする傾向がフィンランド人のほうが強かったことであろう（3.54, 4.26）。問4の「英語の読書を楽しんでいる」についても、フィンランド回答者のほうが肯定的である（3.26, 3.93）。また問8、9(c)、

9(f)を見ると、フィンランド人回答者のほうが「インターネットを英語学習に活用し」(2.58と3.36)、「英語のテレビや映画に親しみ」(2.88と4.30)、「英語話者と話す」割合が日本人回答者よりも高かったことがわかる(2.67と3.26)。さらに数値的にはほぼ変わりはないものの、問9(a)、(b)に見られるように、「文法学習や語彙の暗記」についてはフィンランド人よりも日本人回答者のほうが、わずかに実践者が多いことが垣間見えた。フィンランド人のほうがマスメディアを英語学習の手段としているのに対して、日本人はドリル学習志向が高いことが伺える。

この結果をまとめると、日本人回答者もフィンランド人回答者もともに英語は重要であると考えている点はそれほど変わらないが、英語が好きで読書を楽しんでいるところから伺い知れるように、フィンランド人回答者のほうが、英語や英語学習に対して好意的であると言えるのではないか。つまり日本人回答者の場合、「英語が大事なことはわかるが、英語(学習)は好きではない」と感じており、フィンランド人回答者は「英語は大事だし、英語(学習)も好き」と肯定的姿勢が強いのではないか。好きこそものの上手なれ、などと言うが、日本人学習者が英語や英語学習に対して後ろ向きになっている傾向があることは、英語力向上に影を落とす原因となりうる。その意味で多読の導入は、少なくとも学習者の英語に対する苦手意識を払拭し、より好意的な姿勢で英語学習に取り組んでもらえるよう支援することにつながると言えるだろう。

また、日本とフィンランドの決定的な違いとして、フィンランド人回答者のほうが、机に向かうような「勉強」ではなくとも授業外で自然に英語に触れている頻度が高いということが言えるだろう。テレビや映画、インターネット等は、通常授業中に行う英語学習の一環としてというより、自宅で接する機会の多い媒体である。フィンランドは、多くの報告でも指摘されているように(ヘイノネン&佐藤, 2007; 実川&実川, 2007)、テレビで日常的に英語による放送が見られるという環境にあり、特段の努力をしなくても学習者が自然に英語に触れる機会が多いことは確かである。しかしそれを活用して自主的に英語に触れ意識的に学習の一助としていることは、フィンランド人回答者の多くが自律的学習者として英語学習をある程度コントロールできていることを意味しているのではないだろうか。日本においても地上放送のテレビでこそ英語を耳にすることは少ないが、望めば英語を媒体とする映像や文字情報はいたるところにあふれている。したがって、環境もさることながら、やはり学習者の英語に対する意識、動機づけや自律的学習態度に英語学習が停滞する理由が隠されていると思われる。

6. まとめ

日本の大学の多読授業向上へのヒントを求めて世界的に質の高い教育を提供していると評判の高いフィンランドの授業を視察したが、よく指摘されているような、いわゆる「フィンランド・メソッド」といった定型の授業は、少なくとも今回の中・高の英語授業の視察では見られなかった。当然のことながら、ある1つの学校の授業を数日視察し

ただでフィンランドにおける英語授業の形態について一般化することはできない。フィンランドの教育の特徴とされるようなアクティビティは長期的に視察して初めて体系的に認められるものであり、外国語である英語の授業ではなく、初等教育の国語の授業の中で、より頻繁に行われるものなのかもしれない。しかし、カルタの使用といった特徴を強調することは、フィンランドの教育のほんの一部だけを取り上げて論じているに過ぎないということは確かだと思われる。

さらにフィンランドは読書大国で、年間の国民の図書貸出数は日本の約4倍と言われ(朝日新聞, 2012年11月1日; 松尾, 2008)、読書の指導も活発であるとのことだが⁽⁶⁾、少なくとも視察した英語の授業では我々が現在行っているような多読の指導はなかった。教員への面談調査、懇談によると、ルオスタリヴオリ中・高では多読の指導はほとんど行われていないようである。授業中に読書に関するアンケートを実施し(表2参照)、その際、担当教員が生徒たちの読書の様子をQ&A形式で尋ねたところ、3分の2ぐらいの生徒が英語の本を読んだことがあると答え、古典的名著の名前をあげていた。しかし、読書感想文を時折課題とする以外は、英語の本を読むことは正規の授業に含まれていないようであった。このように、ある程度予想していたことではあったが、カルタも多読指導も直接授業中に観察することはできなかった。

では、実際に視察したフィンランドの英語授業からはどんな示唆が得られ、そこから日本における大学の英語教育にどのようなヒントが得られるであろうか。今回の視察で我々が得たものは、フィンランドの英語授業では、全体として予想以上にオーソドックスな授業が行われており、そのような授業形態が機能しているという事実であった。視察した授業は教員主導のもと教科書の内容(重要表現)の確認をすることが授業の大きな位置を占めており、しかも、4人の教員間でそのアプローチに大きな違いはなかった。フィンランドのPISAでの好成績は、「フィンランド・メソッド」によるものであるというイメージが先行しているが、それは誤解であるとする指摘(増田, 2010; 佐藤, 2009)のとおり、フィンランドの英語教育においても世界の教育者たちが眼を見張るような「仕掛け」が隠されているのではなく、実際には極めて地道な授業が行われているのである。

日本でも今回視察した授業と似たような形式の授業は頻繁に行われていると予想されるが、なぜ日本の教育現場では同様の授業が思うような効果を挙げていないのだろうか。教員との事後懇談で、なぜフィンランドの生徒はきちんと宿題をすませ授業中まじめに取り組むのか尋ねてみたところ、そういった学習態度は一両日で培われるものではなく、これまで積み上げてきたものであり、生徒の責任(self-responsibility)であるとの指摘を受けた。つまり学校は学ぶ場であり、そうすることが当然だという考えが共有されている。

もちろん、日本における大学受験同様、フィンランドでも英語学習への動機づけには国家試験が大きな位置を占めているように思われる。授業中に教員が「これは国家試験に出る形式である」と注意を促したり、模擬試験が定期的に行われたりするなど、フィ

ンランドでも国家試験に向けての準備という外的要因は大きいように見て取れた。ただし、フィンランドの国家試験が修得主義に基づく絶対評価を適用しているのに対し、日本の大学受験は相対評価であるという違いが、英語を学ぶ目的に対する学習者の意識の差に影を落としている可能性も考慮に入れる必要があるだろう（刈谷, 2012）。

加えて、ある教員によると、生徒の多くは、フィンランドは小国であり英語学習はせざるを得ないものと感じているだけでなく、英語が話せることを「かっこいい」と捉えており、英語ができるようになりたいという意識が高いという。またスウェーデン語も必修だが、スウェーデン語は英語より難しいため、スウェーデン語よりは習得しやすいという意識が働くのではないかとの指摘があった。

Dörnyei(2009) のThe L2 Motivation Self Systemによると、第二言語学習の動機づけにおいて、学習者は、理想自己 (ideal-self) と義務自己 (ought-to self) の二つ自己像を持っており、前者は「こうありたい」という未来の理想的な自己像を表し、自律的な内的動機 (intrinsic motivation) と関連性が強い。後者は「～をしなくてはならない」という義務的な外的動機 (extrinsic motivation) に関連している。学習者がどちらか単独だけの動機を要していることは考えがたいが、日本人に比べてフィンランド人は、前者の割合が高いと言えよう。

さらにフィンランドでは教師はエリートとして尊敬されているとのことで、生徒たちは教師の指導に信頼を置き、相応の敬意をもって授業を受けていると考えられた。また学校の授業以外で塾などに通う学習者が少ないことも、学校の授業に集中して取り組んでいることと無縁ではないと思われた。

このようなことから、今後日本の英語教育へのヒントとしては、単にカルタなどの、ある教育活動だけを取り入れるのではなく、自律的学習態度を育む指導法や環境を長期的な視点で整える必要があると言える。しかし、いみじくもフィンランドの教員が指摘したように、学習態度は1日で改まるものではなく、子どもの頃からの積み重ねが肝要である。実際、フィンランドの教育成果は何か劇的で魔法のような指導法 (i.e., カルタ) 一つで成し遂げられたものではないだろう。初等教育から行われるごく当たり前の学習に生徒が正面から向き合った結果なのではないだろうか。日本の教育制度全体にかかわる構造的な問題は簡単に解決できることではないが、教員に対して学生のやる気を引き出す魅力的な仕掛けを求めているだけでは一時的な効果しか上げられないだろう。学生の自主的な学習態度の向上や自律的学習までもすべて教員が責任を負うという理想は、教員に過剰な要求を強いることになる。とはいえ、学生が自律的学習者になるための手助けとなるような授業を提供していくことは常に教員側が意識していなければならない。

以上、フィンランドにおける中・高の英語授業視察から得られた知見について述べてきた。多読活性化のためのヒントを求めてフィンランドの学校を訪ねたわけだが、我々に突きつけられた新たな課題は、日本の学習者を、フィンランドの中高生のように自ら

の責任で英語学習に取り組む自律的学習者を育てるため、現場で何ができるのかという点に集約される。この課題への回答を、今後、実験授業を通して探り当てたいと考えている。

謝辞

ルオスタリヴオリ中・高の視察を可能にくださった慶應義塾普通部の先生方、生徒の皆様には厚くお礼を申し上げます。特に、矢澤和明氏、跡部智氏には、現地視察の助言も含め貴重な情報をご提供頂きました。ここに深謝いたします。また授業視察を快諾してくださったルオスタリヴオリ中・高の先生方、生徒の皆様にも心から感謝の意を表します。

注

- (1) このフィンランド視察調査は、学術研究助成基金助成金 基盤研究C 課題番号 2452067の助成を受けている。
- (2) 「マインド・マップ」は、Buzan Organization Ltd.が登録商標している。
- (3) 「フィンランド・メソッド」は、有限会社イヨが登録商標している。
- (4) 本稿では、フィンランド式教育法と呼ぶ。
- (5) 本渡航調査前に筆者（深谷）が矢澤和明氏に現地事情に関する聞き取り調査を行った。
- (6) 一人当たりの平均貸出図書数が日本は一人当たり5.4冊（朝日新聞, 2012年11月1日）であるのに対し、フィンランドでは一人当たり約20冊（松尾, 2008）と報告されている。

引用文献

- 朝日新聞(2012年11月1日)『図書館の貸出冊数が最多に 国民一人当たり5.4冊』
- Day, R., & Bamford.(1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z.(2009). The L2 motivation self system. In Z. Dörnyei & E. Ushioda(Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self*. 9-42. Bristol: Multilingual Matters.
- Finnish National Board of Education. http://www.oph.fi/english/education/overview_of_the_education_system (2013年6月1日現在)
- フィンランド外務省東京大使館
<http://www.finland.or.jp/Public/default.aspx?contentlan=23&culture=ja-JP> (2013年6月1日現在)
- Fukaya, M.(2010). Extensive reading of language learner: Literature as a step to the pleasure reading of unabridged literature. *2010 Conference Proceedings and Papers(Liberlit Conference)*. <http://www.liberlit.com/> (2013年6月1日現在)

- 深谷素子(2011a)「英語上級者に多読をどう指導するか：『英語を読むのが楽しい』段階から『本を読むのが楽しい、たまたま英語の本だけれど』という段階を目指して」『第83回大会Proceedings』（日本英文学会），31-33.
- 深谷素子(2011b)「読書指導の場としての多読授業の可能性」『第83回大会Proceedings』（日本英文学会），193-195.
- Grabe, W.(2011, September). *Extensive reading: Why isn't everyone doing it?* Plenary session conducted at The First Extensive Reading World Congress. Kyoto: Kyoto Sangyo University.
- ヘイノネン・オッリベッカ & 佐藤学(2007)『NHK未来への提言 オッリベッカ・ヘイノネン：「学力世界一」がもたらすもの』東京：NHK出版
- Hill, D. H.(1997). Survey review: Graded readers. *ELT Journal*, 51(41), 57-79.
- 実川真由・実川元子(2007)『受けてみたフィンランドの教育』東京：文藝春秋
- 刈谷剛彦(2012)『学力と階層』東京：朝日文庫
- 河村茂雄(2011)『日本の学級集団と学級経営』東京：図書文化
- 経済協力開発機構(OECD)(編著)渡辺良(監訳)(2012)『PISAから見るできる国・頑張る国2 未来志向の教育を目指す：日本』東京：明石書店
- 北川達夫(2005)『図解フィンランド・メソッド入門』東京：経済界
- 北川達夫(2006)「Special Report フィンランドの読解教育」『「読解力」を育てる総合教育力の向上にむけて—学力向上のための基本調査報告書』（ベネッセ教育総合研究所）<http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakuryokukoujou/2006/>（2013年6月1日現在）
- 小林朝夫(2009)『フィンランド式頭のいい子が育つ20のルール』東京：青春出版社
- 小林めぐみ(2011)「多読『授業』の可能性を模索する」『第83回大会Proceedings』（日本英文学会）187-189.
- 小林めぐみ・河内智子(2009)「多読授業を活性化させるアクティビティ—」*Seikei Institute for International Studies Working Paper Series*, 11, 1-20.
- 小林めぐみ・河内智子・深谷素子・佐藤明可・谷牧子(編著)(2010)(成蹊大学国際教育センター多読共同研究プロジェクトグループ)『多読で育む英語力プラスα』東京：成美堂
- Krashen, S. D.(1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon.
- Kusanagi, Y.(2005). A class report 2: Course evaluation of pleasure reading course. *The Journal of Rikkyo University Language Center*, 14, 29-42.
- Kusanagi, Y.(2009). A case study: Japanese university students' reflective comments on their extensive reading experiences. *Akita Prefectural University RECCS Bulletin*, 10, 43-54.

- 増田ユリヤ(2010)『教育立国フィンランド流教師の育て方』東京：岩波書店
- 松尾昇治(2008)「フィンランドの図書館を訪ねて」『Library Mate』第4号(実践女子大学図書館), 1-2.
- 文部科学省『PISA (生徒の学習到達度調査)』http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/pisa/(2013年6月1日現在)
- 文部科学省『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm (2013年6月1日現在)
- 那須雅子(2011)「効果的な多読活動の模索：辞書使用の是非に関する一考察」『第83回大会Proceedings』(日本英文学会), 190-192.
- NHK.(2012)『NHK地球いちばん アタマがよくなる!? 授業』2012年12月17日放映
- 酒井邦秀(2002)『快読100万語！ペーパーバックへの道』東京：ちくま学芸文庫
- 酒井邦秀・神田みなみ(2005)『教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ』東京：大修館書店
- 佐藤隆(2009) 熊本子育て教育文化運動交流会(編)『フィンランドに学ぶべきは「学力」なのか』京都：かもがわ出版
- SSS英語学習法研究会(2005)『めざせ！100万語読書記録手帳』東京：コスモピア
- 高田智子(2010)「フィンランドのELP中心アプローチから得られる示唆～CEFRの理念の具現化を支えるものは何か」『小、中、高、大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証』, 152-169. 平成20年度～平成23年度科学研究補助金(基盤研究(A))中間報告(研究代表者：投野由紀夫、研究課題番号：20242011)
- 高瀬敦子(2010)『英語多読・多聴指導マニュアル』東京：大修館書店
- 田中博之(2010)『フィンランド・メソッド「超読解力」—6つのステップで伸びる「言葉の力」』東京：経済界
- 田中博之(2013)「子どもの言葉の力を育むフィンランド・メソッドのすすめ」『早稲田学報』通巻1198号, 20-23.

Appendix 観察リスト（A4の紙1枚分、時系列のメモは別紙に記録）

No. _____

Classroom Observation Notes

日付 _____ 記録者 _____

時間 _____

授業名 _____

本時の目的 _____

教員名 _____

生徒数 男子 名、女子 名 _____

観察のポイント

1	教室のレイアウト e.g., 椅子の位置ほか	写真
2	教室の施設、活用方法 e.g., PC, 黒板ほか	写真
3	授業の形式 教師と生徒の発話の割合	各所要時間
4	ペア活動、グループ活動	所要時間
5	授業内のアクティビティー カルタ式・その他	
6	教師の問いかけ What/why questions Close/Open-end q's	
7	クラスの雰囲気 e.g., 生徒の態度など	

Memo (上記の項目について、時間軸で記録)

執筆者

小林 めぐみ 成蹊大学経済学部 准教授

深谷 素子 鶴見大学文学部 准教授

草薙 優加 群馬大学教育基盤センター 准教授

執筆日時
平成26年4月1日

PRINTED BY
SEIKO-SHA CO. LTD.
1-5-15, NISHITSUTSUJIGAOKA, CHOFU-SHI, TOKYO

Seikei University
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,
Tokyo, 180-8633 Japan